HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語の復興とアイヌ語研究
Author(s)	佐藤, 知己
Relation	アイヌ研究の現在と未来：第1部. 平成20年6月29日. 札幌市
Issue Date	2008-06-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34407
Type	lecture
File Information	28-3-2.pdf, 配布資料

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アイヌ語の復興とアイヌ語研究

北海道大学文学研究科
アイヌ・先住民研究センター

佐藤知己
tomomi@lit.let.hokudai.ac.jp

1. アイヌ語研究の歩みとアイヌ語研究の現在

- 科学的なアイヌ語研究の始まり

金田一京助(1882-1971)が明治39(1906)年、有珠、虻田、幌別、鵡川、沙流の調査を行う(金田一 1908)。叙事詩の存在の報告、歌謡のアイヌ語テキストの採録(「人称接辞」の発見)。明治40(1907)年、樺太東海岸落帆の調査(金田一 1911)。樺太方言と北海道方言の音韻体系の把握(伝記事実は金田一博士米寿記念論集編集委員会(編) 1971に従う)。

金田一京助のアイヌ語研究(1)

1. アイヌ語の音韻体系の正しい把握(金田一 1911)。無声閉鎖音(p, t, k)と有声閉鎖音(b, d, g)の区別なし。r で終わる形式の発見(金田一 1931)。koro「持つ」ではなく、kor が正しい。
2. 「人称接辞」の発見(金田一 1912)。アイヌ語は動詞や名詞が人称に従って語形変化する言語。
3. 名詞の「具体形」と「抽象形」の区別の発見(金田一 1931)。tek「手」(抽象形)、teke「某の手」(具体形)

金田一京助のアイヌ語研究(2)

アイヌ語に限らず、無文字言語の記述的研究そのものが世界的にみてもまだ一般的でなく、記述の方法論も未発達な時代にアイヌ語の重要な特徴についてことごとく正しい判断を下すことができたのは驚異的。まさしく、「天才」である。ちなみに、アメリカ先住民族の諸言語の記述の最初の集大成であるF. Boas の *Handbook of American Indian Languages* が出版されたのが1911年であることを考えると、ほぼ時代の金田一のアイヌ語研究の精度は世界に誇るに足りると言える。

Batchelor (1938) が、r で終わる語の確定、人称接辞の認定、名詞の抽象形と具体形の区別のいずれにも至らず、それどころか名詞の具体形をある場合には「複数形」と記述しているのに比すれば金田一の研究が卓越したものであることは明らか。

金田一のアイヌ語研究(まとめ)

・アイヌ語の音韻構造、文法構造を驚くべき正確さで把握。アイヌ語学の基礎を築く。
・長い生涯に膨大な研究(全集15巻の大部分がアイヌ語、アイヌ文化に関するもの)を行い、後世に研究の道筋を残した。
・依拠している言語資料に関するデータ(話者、方言)がなく、記述の信頼性をどう評価していいか、判断困難な場合がある。

知里真志保のアイヌ語研究(1)

知里真志保(1909-1961)は金田一京助の弟子で、東京帝国大学に卒業論文として提出した『アイヌ語法概説』を昭和11(1936)年、岩波書店から出版した。金田一(1931)に依拠したものだが、金田一(1931)より整理が行き届いていて使いやすく、現在でも価値を失っていない。また、金田一説の単なる祖述でなく、知里独自の見解も盛り込まれている。

知里真志保のアイヌ語研究(2)

金田一(1931)は動詞に第1類（他動詞）と第2類（自動詞）しか認めていないが、知里(1936)は新たに「第3類動詞」を立てている。e-par(o)-a-oiki「我汝を養ふ」のように、主格人称接辞 a-「我が」が接中するような動詞の発見（「接中」という表現は今日では不適当だが、この種の形式はアイヌ語の文法においては理論面で極めて重要性の高い現象）。

金田一(1931)の「第3類」認識

「paro「口」、chieoiki-ekarkar（を手しほにかける、を面倒をみてやる）、chi・・・ekarkar は、・・・をする義。e-oiki の eはそれについて（こゝは口を指す）、oiki は ushi（つける）と結んで oiki-ushi ともいふ、いぢる意、手をかけ世話する意味。paro があれば、甘いものをたべさしてやる意となり、chikarkarpe （着物）という語を受ければ、こしらへて着せてやる意、すべて手づからわが手を下ろして世話する意」

語義的な説明（しかも理解が困難な）であって、第3類について明確な認識を示したものとは言い難い。

知里と金田一の「確執」

金田一(1936)は、「この事（第3類の存在—佐藤注）は私と独立に、知里真志保君が気が附いて、幌別・登別地方のアイヌ語の中から、その数多の例を拾い出して、整然と書き上げて私に示したことがある」と述べる。他方、知里(1942)は、「「摘要」では用詞（動詞）を以上2類に分けただけであるが・・・筆者はそれを第3類と名づけて金田一先生の言語学演習にレポートとして提出した」と述べる。双方の微妙な表現の使用—先取権をめぐる確執(?)。なお、両者とも「第3類」の本質的理解には至らず(佐藤 2001)。

知里真志保のアイヌ語研究(3)

知里（1942）は、態（アスペクト）という節で、「an「ある」とか koro「もつてゐる」とか云ふ用詞は普通には持続的な意味の様相を現はす」と述べて、アイヌ語動詞の意味に関して示唆的な意見を述べている。この問題は現在でも完全には解決されていない（もっとも、今日では、この種の現象はAktionsart「様態の方式」と呼ばれ、アスペクトと区別されるのが一般的）。

知里真志保のアイヌ語研究(4)

知里(1956)は複合名詞の形成を論ずる。yuk san nai 「鹿下ル沢」（永田地名解）という語形は正しくない。yuk o-san nay「鹿[が]—そこへ・出てくる—沢」が正しい（この点については知里の考察は不十分であり、厳密には誤っている、後述）。論文ではないので正当に評価されないことが多いが、アイヌ語の文法研究上、もっとも重要な指摘の一つ。san「下る」は主語一つしかとれない動詞なので、yuk「鹿」と nay「沢」の二つの名詞と関係を持てない。o-san「～に下る」は主語と目的語の二つの名詞を取る動詞なので yuk と nay の二つの名詞と関係できる。アイヌ語の「動詞価(valency)」の問題に初めて具体的に言及した重要な研究。

知里真志保のアイヌ語研究(5)

知里(1953, 1954, 1962)はアイヌ語の語彙の研究（民族言語学的研究）である。

言語の研究と文化の研究を結びつけた、アイヌ語でなければできない研究。

狭義の言語学者にとって重要な現象（音韻、文法）だけが重要な言語事実なのではない。アイヌ文化において重要な言語事実とは何か、という視点を持つことの重要性を示す。アイヌ民族からの視点の重要性。

言語学プロパーの研究からは軽視されるおもむきがあったが、「本当の深いレベルの言語研究とは何か」という問題に対して示唆するところが大。何のために基礎語彙を調査したり人称接辞を調査したりするのか。手段と目的の混同への警鐘。

知里真志保のアイヌ語研究（まとめ）

・アイヌ語の構造に関する先見性（動詞価、動詞のAktionsart、など）。着眼の鋭さ。
・アイヌ語でなければできない深い研究の追求（民族言語学的研究）。
・刺激的で魅力ある数々の示唆を行ってはいるが、論文の形になっていないことが多く、真意が正当に評価されない傾向があるのは残念。
・金田一同様、依拠した資料の典拠がない場合があり、学問的な論証の点で不十分さが感じられる。

アイヌ語研究の現在

- 1. 複合名詞（合成名詞）の問題
- 金田一(1931)が確立した自動詞、他動詞の形態的区別を、知里(1956)が統語論的な現象（関係節形成上の制約）を証拠に挙げてその区別の重要性をさらに確かなものにした。
- 切替(1984)は知里(1956)が見落とした、主語でない名詞を動詞が修飾する形式を「疑似修飾構造」と呼んだ。これはアイヌ語の複合名詞の構造を考える上で重要な発見。

修飾構造と疑似修飾構造

切替(1984)
yuk-o-san-nay「鹿が・（そこ）へ・出る・沢」（修飾構造）
（yuk nay o-san「鹿が沢に出る」という文が可能）
i-sapa-kik-ni「それの・頭を・たたく・棒」（疑似修飾構造）
（*ni i-sapa-kik 「棒が・それの・頭を・たたく」という文が不可能）
知里(1956)は両者の区別を行っていない。

知里(1956)、切替(1984)に共通の問題点(1)

- yuk o-san nay「鹿がそこに出る沢」という「語」の存在自体を両者共に疑問視していないのは問題。アイヌ語の動詞は主語や目的語の人称に従って変化しなければならない。この場合は3人称なので、形としては何も現れていないが、o-san は主語、目的語が共に3人称の場合の形式。「人称」のような文法的な要素(屈折)が語の内部に現れることはどの言語でも普通はない（Bloomfield 1933）。もし屈折要素が現れればその形式は語ではなく「句」である。動詞の人称変化を無視した複合名詞の説明は一般言語学的には問題がある（佐藤 2008a）。

知里(1956)、切替(1984)に共通の問題点(2)

yuk-o-san-nay「鹿が・そこに・出る・沢」のようなタイプの複合名詞はamam-e-cikap「穀物を・食べる・鳥（＝スズメ）」に比べると稀(切替1984)。この偏りはアイヌ語の「抱合(noun incorporation)」にかかわる制約(佐藤 1992)によって説明が可能。主語が他動詞に抱合されることはまず不可能だが、目的語は他動詞に抱合可能（佐藤 1992）。抱合されると自動詞化が起こり(佐藤 1992)、自動詞は名詞に転成可能（切替 1984)なので、名詞に転成された形式は動詞の屈折を免れる（佐藤 2008)。結果として、amam-e-cikap のほうが相対的に句と紛れる度合いが低いので、「語」としての許容度が高いことになる。yuk-o-san-nayのような形式は本来は句であるものが語として用いられるようになった句単語(phrase-word)(Bloomfield 1933)で、特殊な例（だから稀）。

知里(1956)、切替(1984)に共通の問題点(3)

i-sapa-kik-ni「それの・頭を・たたく・棒」（疑似修飾構造）は、ni「棒」がi-sapa-kik「それの・頭を・たたく」の主語になれないので、i-sapa-kik は主格人称接辞を取る可能性がなくなる。
動詞から名詞への転成であると解釈されやすく、脱屈折化が容易。
句と紛れる可能性がなく、語として、より適切度が高い形式（修飾構造よりも疑似修飾構造のほうが語としては適切性が高い）。

複合名詞の新しい見方（語としての適切性）

	語としての適切性（句との紛れにくさ）
i-sapa-kik-ni 「ものの・頭を・たたく・棒」	100% i-sapa-kik は句でなく1語の自動詞と解釈されやすい形式。しかも ni は主語と解釈できないので名詞（脱屈折化）解釈が容易。
amam-e-cikap 「穀物を・食う・鳥（＝スズメ）」	50% amam「穀物」は目的語なので抱合による自動詞解釈（名詞への転成、脱屈折化）が可能。それだけ語としての適切度大。
eper-se-sito 「子グマが・背負う・団子」	0% 屈折を含む句と同一の構造。主語の抱合は許されないので自動詞解釈が不可能。語としての適切度が低い特殊な形式。おそらく語としてのステイタスが固まっていないか、特殊な効果をねらった表現である可能性（日本語の「ふりこめ詐欺」、「人でなし」などを参照。）

複合名詞研究の効用（地名研究）

以上の考察は地名研究にも間接的に役立つ。

yuk-o-san-nay「鹿が・そこに・出る・沢」という形式はアイヌ語の単語として不可能ではないが、句とまぎれやすい、「すわりの悪い」形式である可能性がある。このタイプの「語」（地名）が資料の中に出てきたら、実在する地名かどうかについて慎重な検証が必要。地名資料は形や意味の正確さを期しがたく、言語資料として使用する場合は細心の注意が必要。現代の資料を軽視して古い地名資料を盲信するのは学問的な態度とは言えない（佐藤 2005）。

アイヌ語の再帰接頭辞

2．アイヌ語の再帰接頭辞

アイヌ語には yay-「自分を」、si-「自分を」という二つの再帰接頭辞があるが、両者の区別は微妙である。この問題を諸家がどう扱っているのかを見ることはアイヌ語研究史とその問題点を概観するのに便利である。

再帰接頭辞の研究史(1)

以下、ポイントのみを要約して示す。

金田一(1931):　yai-pusu「（意志的に）浮かび出る」
　　shi-pusu「（無意志的に）浮かび出る」
知里(1936): 同上。
知里(1942): jaj- rayke「自分を・殺す（＝自殺する）」
　　ヤイ・キラ・レ「自分を・にが・す」（中相）
　　si-etaje「自分を・引く」（中相）
　　シ・カスイ・レ「自分を・てだすけ・さす（＝してもらう）」
　　シ・ライ・レ「自分を・死な・せる（＝死んだふりをする」

再帰接頭辞の研究史(2)

田村(1956): yay- は意志的（yay-pusu）、si- は無意志的(si-pusu)。
田村(1988): yay- 再帰相、yay-kik「自分を打つ」
　　si- 中相、si-pusu「ひとりで浮き上がる」
田村(1996): yay- は主語と同一人物をさすが si- はそうとは限らない。
　　yay- は意志的(yay-pusu)、si- は自動詞化の接辞(si-pusu)。
中川(1995): yay-「自分を、に、の」、yay-kotan-ka-epunkine「自分　の・村の・上を守る」

si-「自分を、に」、si-turi「自分・を伸ばす（＝伸びる）」、si-pita「自分・をほどく（装束を解く）」

再帰接頭辞の研究史(3)

浅井(1969): yay-「自分自身」、yay-ukao「自分を・片付ける（＝ひっこむ）」
（si- については個別の言及なし。ただし、si-ipe-re-yar「食事させてもらう」という例を別の箇所で挙げている。）

再帰接頭辞の研究史(4)

村崎(1979): yay-「自分を、に」、yay-rayki「自分を・殺す（自殺する）」
si-「自分を」、si- +動詞+ 使役接尾辞で、以下の意味を表す。
si-teere-ka「自分を・待た・せる（＝待ってもらう）」
si-mokon-te「自分を・眠ら・せる（＝寝たふりをする）」
Kirsten (1986): yay- 'oneself', yay-kisma 'hold on to onself'
si- 'by itself' (spontaneous action), si-pirasa 'spread out naturally'

再帰接頭辞の研究史(5)

切替(1987): yay- 他動作主的、si- 受動的。yay-kor-e「自分に・持た・せる」、yay- は kor「持つ」の動作主。si-kor-e「自分を・持た・せる（＝子供を持つ）」（ただし、「自分を子供に持たせる＝子供の親となる」、の意であるとする。）
（ただし、si-kor-e という解釈自体が誤りである可能性もある。アクセントが si- にある形式だとすれば、siko-re「生まれさせる（＝産む）」と分析するのが妥当で、もしそうだとすると再帰接頭辞 si- とは無関係な形式ということになる。）
Shibatani (1990): yay- (intentional), si- (unintentional)
奥田(1999): yay「自分」、si「自分」

再帰接頭辞に関する諸説のまとめ

a. 「意志的」、「無意志的」が有力。ただし、「他動作主的」、「受動者的」という説もある。
b. 「～してもらう」、「ふりをする」の表現では si- が用いられる。

論評：「意志、無意志」は「してもらう」、「ふりをする」の説明にはそのままでは使えない（si- は無意志的なはずだがこれらの行為は意志的である）。「他動作主的」、「受動者的」という説明はb.の「してもらう」の説明には有効だが（si- はこの場合、動作の受け手で、仕手ではないから）、「ふりをする」はどう説明されるのか明らかでない。また、yay-pusu「自分を・浮かばせる」、si-pusu「同」のような従来、意志的、無意志的と説明されて来た事例についてもどのように説明がなされるのか明白でない（結局、意図的、無意図的と大差ない説明になると思われる）。

再帰接頭辞の解釈

佐藤(2007): yay- は「直接的再帰接頭辞」、si-は「間接的再帰接頭辞」である。yay- は主語が直接、行為に関与すること、si- は主語が行為に（通常は他者に依存して）間接的にしか関与していないことを示す形式である。

佐藤(2007)による再帰接頭辞の解釈の例

yay-pusu「自分を・（直接関与して）浮かび上がらせる」（意志的）
si-pusu「自分を（他者に依存して間接的に）・浮かび上がらせる」（無意志的、他者の関与は暗示されているだけで文脈に現れる必要はない。）
si-kasuy-re「自分を・（誰かに）手伝わせる」（「手伝う」という行為自体は他者が行う。自分は間接的に「させる」だけ。）
ko-si-ranpewtek-ka「～について・自分を・（他者に依存して間接的に）知らなく・させる」（他者に物を知らないのだな、と思ってもらうことによって、間接的に自分を「無知化」する＝知らないふりをする）
多くの言語で再帰は主語の直接関与を積極的に表示する機能（アイヌ語では yay- がその機能を担う）。アイヌ語はさらにこの通則に反する場合（主語の関与が間接的）を積極的に表示する形式（すなわち si-）を併せ持つ言語である。

再帰接頭辞の研究史から見えるもの

・アイヌ語研究の第一人者達の説明にも不十分な点が少なくない。まだまだよくわかっていない点が多い。
・研究者の絶対数がすくない。研究の層を厚くする必要性。
・先行研究の集成や、資料の提示という側面が強く、言語学的な分析が不十分である。テキストや語彙の収集と併せて、文法的な研究ももっと進める必要がある。
・文献資料の研究と並んで研究者自身の責任による調査に基づく研究がもっと発表されるべきである（言語研究は資料の性格や精度ができるだけ明確な資料に基づくべき）。

文献によるアイヌ語研究(1)

3. 文献によるアイヌ語研究
『アイヌ神謡集』は印刷ミスが非常に多いので本文批判を行わないと実は使用が困難。多くは明らかなミスなので問題が少ないが、中には気づきにくいものもある。「著者が自分で書いたから正確だ」というのは幻想。
eramuka「意気消沈する」という語があるとする注釈書が多いが、これは e-ramu-kapatek「～について・心が・一挙にぺちゃんこになる」という語が誤って eramuka patek と切り離されて印刷されたために起きた誤解である可能性がある（佐藤 2004b)。文献は聞き取り調査の資料よりも取り扱いに注意を要するものだ、ということがもっと認識されるべきである。

文献によるアイヌ語研究(2)

古い文献であるほど、取り扱いが困難となる。
日本側最古のアイヌ語彙集「松前ノ言」
「おん可い わらん遍ˋの事」とある。okkay「男」に該当する語とみられる。金田一(1924)は「筆者に促音と撥音の書き違いがある」と述べているが、理解困難な説明。
この当時は *onkay という形であったと考えたくなるが、そうではない。様々な要因を考慮して判断する必要がある(佐藤 2004a)。

松前ノ言の成立年代

「松前ノ言」の成立時には「ん」で促音を表していたと考えるのが妥当。豊臣秀吉の自筆書状にも「ほんく（発句）」、「せんかく（折角）という表記がみられる（中田 1972)。この表記から逆に成立年代を推定できる（佐々木 1925 では寛永年間[1624-1644]以前とするが、室町期にまで遡る可能性）。

文献によるアイヌ語研究(3)

アンジェリスの『蝦夷国報告書』所載のアイヌ語
1618年と1621年に松前に渡航したイタリア人イエズス会士によるアイヌ語の記録（チースリク 1962)。
yemuxi「刀」（現代の形式 emus）
faibo「母」(現代の形式 hapo)
ye、fa という表記の理由→当時の発音が反映されているというよりは、カナで書かれた資料を当時のローマ字転写法で表記した可能性→アンジェリスはアイヌ語を直接聞いていない(?)(佐藤 2008b)

文献によるアイヌ語研究のまとめ

・古い文献はあまり研究されていないので利用は今後の課題。
・文献の性格や年代に関する通説には再検討を要するものが少なくない。
・文献資料は文献学的な吟味を経た上で使用する必要があるが、現状ではこの点があまり認識されているとはいえない。

2. アイヌ語の復興とアイヌ語研究

・アイヌ語研究はアイヌ語の復興と直接関係する。
1. 新語形成の問題
「先住民」をどう訳すか。
si-mosir-un-kur「真の・土地・にいる・人」→ mosir-un-kur が句と解釈される余地を持っているために si-「真の」が mosir-un-kur 全体に付く、という解釈を受けにくい可能性。新語を造る場合にアイヌ語研究の成果が役立つ。

「先住民」のアイヌ語訳

佐藤試案： teeta-wano-an-kur 「昔・から・いる人」→本来は句であるものを語として使う。一語としてのまとまりには欠けるので本来は好ましくないが、新語を造りやすい。語としての適切性を備えた形式は既に存在している場合が少なくなく、新語の形成には利用しにくいことがあるため。i-y-or-un-kur「その・場所・に住んでいる・人」は実際には「居候」の意味であるし、sir-un-kur「土地・に住んでいる・人」は実際には「ろくでもない人」という意味になりそうである。

疑問文の作り方(1)

「この人、誰だ？」を何と言うか。
taan kur hunna ne?「この・人・誰・だ」とはならないようだ。
taan kur hunna an?「この・人・誰ある」となる。
「おまえは誰だ？」を何と言うか。
hunna e-an?「誰・おまえは・ある」とはならないようだ。
hunna e-ne?「誰・おまえは・だ」となる。
不規則な現象。基本的な表現でも簡単には予測できないものがある。アイヌ語研究の効用。

疑問文の作り方(2)

なぜ taan kur hunna an? に対して、hunna e-ne?となるのか。理由はよくわかっていないが以下のような仮説が立てられる。

疑問文の作り方(3)

*taan kur anakne hunna an?という例は見られない。anakne は既知のものを示す助詞→taan kur は聞き手にとって未知のものととらえられている。
ne「～だ」は主語を適切に特徴付ける補語を要求する（「僕はウナギだ。」のような表現は ne にはできない）。
性質が未知のものをさらに不特定なものを意味する「誰である」によって特徴付けるのは有意味な叙述になりにくい（ne「～だ」にとって不適切）。

疑問文の作り方(4)

二人称は人称要素→既知の要素（聞き手だから）。
既知の要素に関してさらに「誰であるのか」と叙述することは意味をなす（ne「～だ」の使用と衝突しない）。

命令文と人称代名詞

「おまえも行け」にあたる eani ka arpa!のような文は言えそうに思えるが、実際にはそれほど一般的ではないようである。
例があるから言える、というのは言語学的には不適切。典型（prototype)からはずれた言い方かどうかを常に考慮する必要性。
人称代名詞は呼応する人称接辞があるのが普通。2人称主格人称接辞が付かない命令形との共起は構造的には典型からはずれた構造。

アイヌ語復興への実践的問題点（1）

他の語学と違い、アイヌ語は研究の蓄積が少なく、整理も不十分。研究者の研究成果を一般の学習者が簡単に利用することは困難。現時点では辞書や文法書だけでアイヌ語作文を行うことは非常に難しい。アイヌ語研究の成果と学習者をつなぐ適切な指導者の存在が不可欠。

アイヌ語復興への実践的問題点（2）

単語を覚えただけでは正しいアイヌ語文を作れない。単語を覚えればアイヌ語に親しんだことになる、という考えは安易な考えである。英単語を覚えただけでは英語ができるとは言わないのに、アイヌ語については文法はどうでもよいから単語を一つでも覚えれば、と言うのは、一種のアイヌ語蔑視の思想ではないか。

アイヌ語の復興とアイヌ語研究(1)

アイヌ語の復興運動はアイヌ語研究との二人三脚が望ましい。

復興運動から研究への新たな視点の提供
←→研究から復興運動へのデータの提供

具体的には、新語（新表現）委員会を常設して問題点を議論することが必要。それとアイヌ語を教える専門家を育成する必要。

アイヌ語の復興とアイヌ語研究(2)

アイヌ語研究者とアイヌ語学習者、アイヌ語使用（希望）者がいるだけでは不十分。両者を結びつけるアイヌ語教育の専門家が必要だ。どんなに良い教科書や資料があっても、それを教えるアイヌ語教師がいなければ宝の持ち腐れになる。今後の重要課題の一つ。